

源の潤滑に伴う薪価格の高騰が、イロリ・ストーブをふんだんに使うことを許さないためである。

2. 農家の性格

次に採暖のタイプが農家のどのような性格の下で成り立っているかをみれば、最も端的にはコタツだけ（タイプVI）の農家においてであろう。ここでは炊事がカマドで行われるため、ストーブ・イロリを含むタイプと違って炊事に際しても採暖が出来ない条件におかれるが、それを許している家族の人間関係は、炊事担当者たる主婦・嫁が何れも家娘で、好きな時に採暖出来るという身分的自由さを持つためである。またストーブを使用している農家の多くが兼業農家であるということは、兼業による社会的接触の広さがストーブの導入に関係するものと思われる。

特にⅢ型の農家が家の統卒者である経営主が別居している所から、個人の採暖を生じている点注意すべきである。

4. 現状における採暖様式の矛盾と将来の動向

冬期間の各家族員の生活は主婦・嫁が専ら作業場で葉

仕事に従事し、経営主・長男が外用と休息に終始するというように、家族内の地位によって違っている。そして経営主・長男がその身分的な自由さの故に好きな時コタツへ入れるのに対して、婦人は夕食後の団欒を通じてのみ採暖が可能になっている。しかも家族構成が複雑になる程、この採暖における身分的關係が強まっている。このことは広いダイドコロのイロリを中心に、家長の統卒の下に全ての生活行為が採暖と未分化に営まれていた段階での、茅葺屋根・広いダイドコロ・イロリ・農作業・家父長家族関係といった一連のバランスを保った適応の仕方からの変化の過程でより明らかにされる。すなわち住宅構造をそのままに、採暖だけが他の生活行為と切離されてコタツに固定されるという変化の仕方の不均衡さが、家父長の家族関係の残存と結びついて、前述の矛盾が行れたと考えられる。

しかしこの矛盾はまだ家族員によって明確に把握されておらず、家的イデオロギーと寒さに適応しない住宅構造の下で、コタツによる採暖に固執し、多室暖房一住生活における個人の確立（採暖も含めて）一つの芽生えが見出せない段階といえよう。

山形県高畠地区における乳牛飼料の実態について

小笠原 璋・中山 誠一郎・神 保 憲 雄

（山 形 県 農 試）

東北6県の共同研究である「飼料構造の大数調査」を素材として、本県酪農の中心地である高畠町（旧二井宿村・和田村）並びに上ノ山市（旧中川村）の2地点における飼料の生産並びに給与の構造を解析し参考に供した。当地区の酪農型は養蚕との補合関係をなす型態が圧倒的に多く、これが内容を分類すると第1表の通りであって、酪農養蚕型が最も多く、次に養蚕酪農型・酪農兼業型・酪農養蚕商品作物型・酪農専業型となっている。飼育牛は第2表の通り登録牛が多く全農家の41%に飼養

されているが、産乳量は必ずしも高くない。すなわち搾乳牛1頭当りの年間乳量は15～20石が最も多く、35.8%を占め、20～25石は25%、30石以上がわずかに6.7%で

第2表 乳牛の登録別飼育農家数

項 目	登 録 別	登 録				雑種	不詳	計
		高等	血統	普通	計			
戸 数		27	7	20	54	65	11	戸 130
比 率		20.8	5.4	15.3	41.5	50.0	8.5	% 100

第3表 乳牛1頭当り産乳水準

項 目	水 準	5石以下	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	30石以上	計
頭 数		2	9	15	43	30	13	8	頭 120
比 率		1.7	7.5	12.5	35.8	25.0	10.8	6.7	% 100

第1表 酪 農 の タ イ プ

項 目	タイプ	酪 農 養 蚕 型	養 蚕 酪 農 型	酪 農 兼 業 型	酪 農 養 蚕 商 品 作物 型	酪 農 専 業 型	計
戸 数		55	37	29	9	4	戸 134
比 率		40.8	28.1	21.5	6.7	2.9	% 100

第4表 農家の概況

耕地面積				採草地	乳牛頭数	飼料作物別栽培面積 (戸数)								1頭当り飼料栽培面積	飼料作物作付率
水田	普通畑	桑園	小計			青刈デントコーン	レープ	青刈えん麦	ルタバカ	牧草類	青刈大豆	青刈ライ麦	計		
反	反	反	反	反	頭	反	反	反	反	反	反	反	反	反	%
6,500	4,300	4,300	8,600	1,800	1.7	1,400 (131戸)	0.404 (88戸)	0.328 (80戸)	0.300 (91戸)	0.300 (25戸)	0.125 (12戸)	0.123 (42戸)	3,200	1,900	24.7

ある。一方飼料作物の作付関係をみると第4表の通りであるがほとんどが高刈桑園の下作であり、乳牛1頭当りの作付面積は1.9反、農家1戸当りは3.2反となっている。

作物としては、青刈デントコーン・レープ・青刈えん麦・青刈ライ麦・ルタバカ・牧草類・青刈大豆等であるが、青刈デントコーンが最も多く、他は0.1~0.3反程度である。近年漸く一部農家に牧草類の導入が見られるようになったが、全戸数の20%程度である。なおこれら飼料作物の耕種方式はすべて人力で行われている。飼料生産を水田・畑・畦畔・採草地の地目別にみると第5表の通りであって、TDN(養分総量)・DCP(可消化粗蛋白)・DM(乾物)の何れにおいても畑生産が最も多く、TDNでは畑型が32.8%、畑畦畔型が20.9%であり、DCPではその傾向が更に強く畑型が61.2%、畑畦畔型が20.2%であった。更にDMにおいても畑型が31.4%、次は水田畑畦畔型となっている。乳牛1頭当りの年間飼料給与量を濃厚飼料の占める割合でみると第6表の通りであって、TDNでは25~50%までに該当するのが最も多く56.6%を占める。DCPについては更に高く50~75%が50%を占め、更に75%以上が4戸あった。これに対してDMでは低い出現率が多く25%未満が74.6%となっている。これらを総合するに当地区の酪農は濃厚飼料多給与の形で行われており、加うるに濃厚飼料の大半は購入し、その主体は配合飼料と藁となっている。次に年間給

第6表 濃厚飼料の割合による分類

区分 比率	戸数 (戸)			比率 (%)		
	TDN	DCP	DM	TDN	DCP	DM
25%以下	57	12	100	42.5	8.9	74.6
25 ~ 50	76	51	34	56.6	38.0	25.4
50 ~ 75	1	67	—	0.9	50.0	—
75%以上	—	4	—	—	3.1	—
計	134	134	134	100	100	100

第7表 購入飼料の割合による分類

区分 比率	戸数 (戸)			比率 (%)		
	TDN	DCP	DM	TDN	DCP	DM
25%以下	74	17	103	55.3	12.7	76.8
25 ~ 50	58	66	31	43.2	49.3	23.2
50 ~ 75	2	50	—	1.5	37.3	—
75%以上	—	1	—	—	0.7	—
計	134	134	134	100	100	100

与量を購入飼料の割合でみると第7表の通りであって、DCPでは25~50%の階層にモードがあって49.3%を占め、更に50~75%の階層が37.3%を占めている。次に飼料給与を冬季・夏季・年間の飼料構成でみると第8表の通りであって、冬季飼料構成のTDNでは茎稈濃厚飼料型が20.8%を占め、次いで濃厚飼料型・サイレージ濃厚飼料型となっている。DCPでは濃厚飼料型が73.2%で

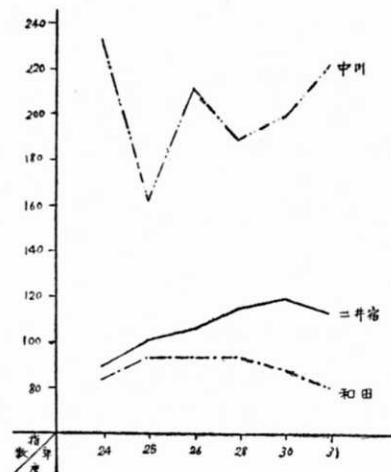
第5表 飼料の生産基地別タイプ

区分	タイプ		水田型	畑型	畦畔型	採草地型	水田畑型	水田畦畔型	水田採草地型	畑畦畔型	畑採草地型	水田畑畦畔型	水田畑採草地型	計
	戸数	比率												戸数
TDN	2	1.5	44	32.8	10	7.1	2	1.5	8	6.0	4.5	2	1.5	134
DCP	1	0.7	82	61.2	12	8.9	—	—	4	3.0	—	—	—	134
DM	2	1.5	42	31.4	5	3.8	8	6.0	16	12.0	3.9	3	2.3	134

第8表 給与飼料構成タイプ

項目	区分 構成タイプ	TDN		DCP	
		戸数	比率	戸数	比率
冬季	濃厚飼料型	21	15.7	98	73.2
	茎稈濃厚飼料型	28	20.8	—	—
	飼料作物濃厚飼料型	—	—	15	11.2
	サイレージ濃厚飼料型	21	15.7	—	—
夏季	野草型	35	26.1	—	—
	濃厚飼料型	—	—	71	53.0
	野草濃厚飼料型	47	35.1	—	—
	蚕沙濃厚飼料型	—	—	14	10.5
年間	飼料作物型	16	11.9	—	—
	濃厚飼料型	47	35.1	93	69.4
	飼料作物濃厚飼料型	—	—	22	16.4

極めて多くなっている。夏季飼料構成においても濃厚飼料への依存が非常に高い。すなわちTDNでは濃厚飼料野草型が47戸の35.1%を占め、DCPでは濃厚飼料型が71戸の53%となっている。年間の構成についてみても同じ傾向であって、TDN・DCPの何れも濃厚飼料型が第1位を占める。高畠地区の酪農は古い歴史を持っているのであるが、酪農経営のあり方には解決を要する大きな問題を多くかかえており、特に飼料問題は大きな課題



第1図 乳牛頭数の趨勢

といえる。一方調査対象集落の乳牛頭数の趨勢をみると第1図の如く、二井宿・和田では最近減少の傾向が見られ、これは乳価と飼料代とのシェーレ現象に起因しているのであって、生産費の低下を計ることが緊要である。このためには購入依存の酪農から自給飼料の利用度を農経営に切り替えることが発展策の第一歩であり、これ高める酪が対策としては現在の分散されている古木高刈桑園を整理統合することによって飼料専用畑としての利用度の拡大・採草地の改良並びに良質飼料作物（牧草類）の導入が望ましいのであって、これらの諸問題こそ地域の酪農経営改善の重要課題となろう。

岩手県北畑作地帯の農家経営における大豆の地位と役割

中谷真也・松田主一・佐藤宏三

(岩手県農試)

この研究は「大豆生産安定のための総合研究」の一部としてわれわれが担当したもので、岩手郡西根村渋川部落全戸32戸の調査を主体にして考察したものである。

この調査では特に大豆が経営全体の調和にどのような立場と役割を果たしているか、それが経営内外部の条件の変化に対応してどう変ってきたかを明らかにしようとした。

従来この地方の畑作経営は作自相互に緊密な補完関係をもつ自給生産様式によって続けられてきたが、戦後特に最近の米生産量の増加・生活特に食生活慣行の変化・商品経済の滲透・馬需要の減退・兼業従事機会の減少・

農産物価の下落等経営内外部的変化は、商品生産部門の導入拡大と畑自給作の縮少をもたらしつつある。

ヒエ・アワ・ソバは漸次商品作または飼料作に代替されてきたが、大豆はあまり大きな増減をしていない。ということは大豆の多面的な性格が全体の調和にとって現在なお有用なものであることを物語っているものと考えられる。

生産大豆の仕向け別数量は農家一戸平均販売4.9石・飼料0.7石・食糧1.4石である。

食糧としての仕向けは階層差が大きく一人当り量としてみても、小階層農家では販売量増加のため最少限に圧